

温もりの中で

福島之母（福島県）

東日本大震災を経験したことによって、悲しくて泣き、悔しくて泣き、嬉しくて泣き：私はどれだけの涙を流し、そして、どれだけの温もりを感じたことでしょうか。

震災当時、妊娠初期。とにかくその日は悪阻も重なったのかもしれないがいつも以上に体調が悪かった。今思えば震災の予兆だったのかもしれない。職場でめまいのため椅子に座ってられない状態で、早退しようというさなか、あの大地震が起きた。揺れる中、自分はどうなってもいい、とにかくお腹の子を守りたいとお腹を抱えデスクの下に隠れた。その後、外へ避難。外は雪が降りとてもとて

は風の強さ、方角を気にする。自由に外で遊ばせてあげることができない。これが福島県で子育てをする家の現実なのだ。正直辛いこともあります。子どもの将来の健康のことを想うと涙が出てきます。でもこの地で生きて行くと決めた以上、頑張つて生きていかなければなりません。東日本大震災を経験したことによって失ったものも大きいけれど家族の絆や感謝の気持ちなど得たものも沢山あります。様々な方たちから「大丈夫？」と、あたたかい言葉を頂き励まされ、いろいろなことで支え助けてもらっています。この場を借りて「沢山の温もりを本当にありがとうございます」

果たして、自分にも人に対して、同じような温もりを感じてもらうようなことができるだろうか。同じようにはできないかもしれないけれども、自分がしてもらったように、人に対して温かい気持ち

も寒かった。

余震がまだ続く中、年配の女性が私とお腹の子を気遣い、ホックカイロを持ってくると言い残し、まだ大きく揺れる余震の中、建物の中に入って行き、私にホックカイロを持ってきてくださった。とても暖かかった。体もそして心も温かくなった。目に涙が浮かんだ。

そして福島原子力発電所の事故。

妊娠初期ということもあり不安な生活を送っていたが、自宅雨樋より90マイクロシーベルトもの放射線量が計測され、不安の毎日ではなく恐怖の毎日が変わってしまった。子どもが生まれたら庭でバーベキューをしたいなどのいろいろな夢も奪われた。

食べ物に気をつけ、どこに行くにも線量計を持ち歩く。休日は行きたい場所、本当につれて行きたい場所ではなく、放射線量が低い場所。洗濯物や出かける日

で接していききたい。いろいろな温もりをずっと忘れない。そして我が子にこの経験を伝えたい。奪われた以上の夢を持つて前向きに明るく過ごしていきたい。

光り輝く未来へとまっすぐに歩き、穏やかで寛大な心を持ち元気にのびのびと育ってほしい、との想いから、2011年3月11日東日本大震災当時お腹にいたわが子を「歩寛（あゆひろ）」と命名。

そして現在生後10か月。両手を広げた私の腕の中に、微笑みながらよちよちと5歩、歩き出しました。

この福島の地であなたの笑顔を絶対を守りぬく。

